

相談支援における連携の 必要性とあり方について

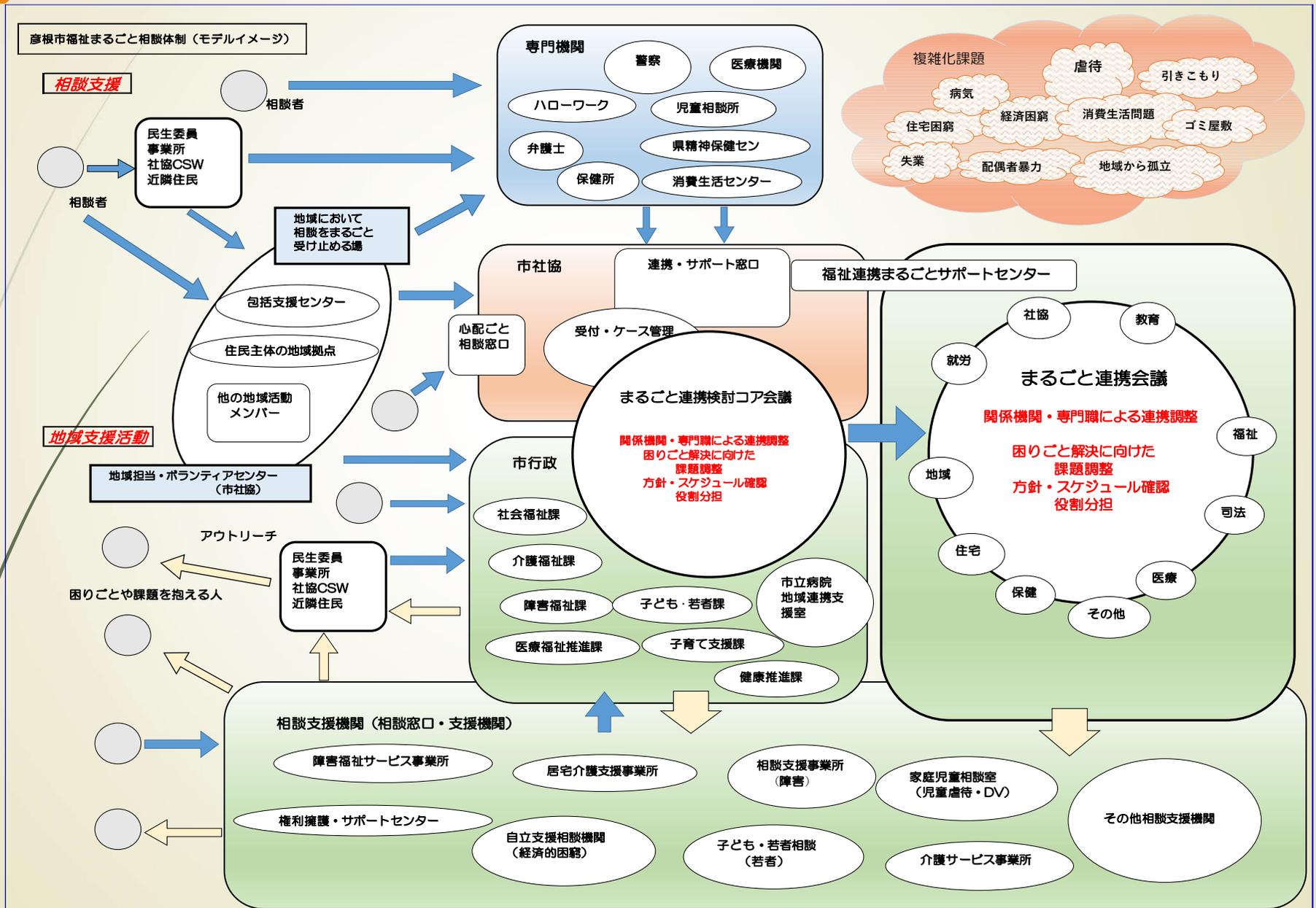
令和3年度 第1回 相談機関交流会
令和3年8月27日（金）13時30分～

彦根市こども未来部子育て支援課
川崎 孝

令和3年度 相談機関交流会の目的

既存の制度では対応できない制度の狭間にある課題に対応できるよう、現在、本市で取り組んでいる「福祉まるごと連携による相談体制」および各種取組のPRを行いつつ、体制構築を進め、各相談機関のより一層の連携強化と職員のスキルアップを図る。

相談支援連携のイメージ図



1 『相談支援』とは ①

相談：気づき（関心）～ニーズの発見へ
・・・「どうしたのかな？」（心配）

1次発信者…本人 家族 近隣者 地域支援者 支援機関

2次発信者（1次受信者）…地域支援者 支援機関

3次発信者（2次受信者）…支援機関 分野別専門機関

3次受信者 …連携調整機関（社協・行政）

ニーズとは、その人にとっての快適な状態からのずれを埋めるために必要なことで、その人の「欲求（〇〇して欲しい）」はニーズの表出された一部でしかない。

1 『相談支援』とは ②

支援目標：「ニーズを満たす」…「ずれを埋める」

- 「欲求」に単に応じるだけではニーズは満たされない。さらに「欲求」が強まる危険性がある。

④支援者の位置について、「運転の助手席」「伴走」と言われるのは、車の運転や走るのはその人自身であるということ。できることまで代わりにやって、その人の主体性を奪ってはいけない。

2 今日までの社会的課題 ①

要因：社会の変化・・・必然的。速度も変化。

- 経済成長、都市化、人口移動、地域の変容、生活様式の変化、人間関係の変化、利便性の向上・手段の高度化、すべての分野で個別化、多様化、複雑化

※例えば

- 移動手段：徒歩、馬車、電車、自動車（モータリゼーション）
- 通信手段：会話、手紙、電報、電話、ラジオ、テレビ、携帯電話、スマートフォン、SNS
- 電気の普及：家電製品による日常生活の利便性の向上

2 今日までの社会的課題 ②

- 産業革命以後、生産のための労働力が必要となり、都市に人口が移動して行った。生活（衣食住）のための消費財が必要となる。
※生活の向上のためには所得額の増加が前提。市場の拡大をもたらす。⇒経済発展⇒・・・バブル⇒格差の拡大
- 経済社会の発展高度化→高度経済成長の時代→1億総中流→市場経済のグローバル化→バブル→崩壊→不況→経済成長の低迷→格差の拡大→回復傾向・・・格差は残ったまま
- 地球温暖化による大規模な気候の変化・・・永久凍土の解凍、海面上昇、自然災害も極端になる。
- 新型コロナウイルスの世界的流行・・・危機管理の必要性、経済活動の低迷
・・・などなど。

3 支援に関する法制度の細分化

●課題が多様化、複雑化するとともに、相談支援機関についても、法制度が整備され、専門・細分化されてきた。

※高齢者福祉：老人福祉法、介護保険法、高齢者虐待防止法

障害者福祉：身体障害者福祉法、知的障害者福祉法、精神保健福祉法、障害者総合支援法、発達障害者支援法、障害者差別解消法

児童福祉：児童福祉法、児童虐待防止法、子ども・子育て支援法、子どもの貧困対策法

ひとり親家庭：母子・父子・寡婦福祉法

生活困窮：生活保護法、生活困窮者自立支援法

保健：健康増進法、母子保健法

労働：労働基準法、職業安定法

その他：子ども・若者育成支援法、成年後見制度、更生保護法、売春防止法、他

4 連携の必要性と方法

- 支援目的は、ニーズを満たす（快適な状態にする）ことにある。
- 支援機関の組織も大きくなり、分業体制にある。
- 切れ目なく、支援を効果的に実践するためには支援機関の「連携」が極めて重要である。連携しないと効果的な支援ができない。
- ではどのように連携するのか？
 - ① 紹介する。資料を提供する。
 - ② つなぐ。依頼する。
 - ③ 支援の目的・方針を明らかにし共有する。
 - ④ 一緒に計画する。支援の順番を決める。
 - ⑤ 役割分担して支援する。
 - ⑥ 協力して動く。

◎事例1

母（主）：75歳 父（夫）：5年前に死亡
長男：43歳 引きこもり 長女：40歳 結婚し市外転出
住居：1戸建て住宅

- 1か月ほど前から主の様子がおかしいと近隣から地区民生委員に相談があった。
- 回覧板が回らないことがあり、訪ねると返事があいまいで忘れていくことが多くなってきた。家の中も乱雑になっているようだ。外にも出ず、自治会の行事にも出て来なくなっている。
- 長男は独身で、以前は会社に勤めていたようだが、父（夫）の死以降は近所の人にもあまり姿を見かけたことがない。時おり近くのコンビニには買い物に出ているようである。
- 家の中の様子も分からず、近隣の皆も心配になってきたというもの。

◎事例2

母：23歳 父：24歳 とともに知的障害のある夫婦で障害年金の収入がある。結婚を機に父のアパートでの住まいとなった。

- 当初は祖父母の支援があったが、最近では援助も途切れがちである。
- 父はA型事業所で働く。
- 長女 1歳8か月 健診では言語に遅れがある。
- 母の親は市内に住む。父の親は県外で遠方に住む。
- 出産後は、保健師やサービス事業所の見守り等支援で何とか子育てもできていたが、父が非協力的で母の家事・子育ての負担感が高まり最近では育児放棄ぎみになっている。
- 近隣には支援者がなく、赤ちゃんの泣き声と女性の叫び声がするとの通告があった。

◎事例3

男性：30歳 精神障害手帳あり アパート1人住まい

- 大学卒業後就職するも、職場の人間関係がうまくいかず、トラブルを繰り返し、精神科クリニックに通院治療していたが、休職後離職した。以後1年間無職のままである。
- 両親は健在だが遠方で疎遠となっている。
- ある夜、近所の公園で散歩中の人に声をかけられたことから喧嘩となり警察に通報される。食べる物もないとのことで、警察から福祉事務所に相談があった。

※いずれも、どういう問題が発生しているか。ニーズは何かについて考えてみてください。
ニーズを埋めるためにはどういう支援ができるでしょうか。

◎事例 1

母：75歳 父：5年前に死亡

長男 43歳 引きこもり 長女 40歳 結婚し市外転出

住居：1戸建て住宅

●課題

- 第1発信者…近隣 第1受信者…地区民生委員

第2受信者…包括支援センター、市行政

「最近様子がおかしい。いつもと違う。」・・・気づき物忘れ。回覧板が回らない。返事があいまい。家の中も乱雑。外にも出ない。自治会の行事に出て来ない。長男の姿を見かけたことがない。・・・問題の発見

※地域では声掛けや様子を見ることは可能だが、家庭の中には入りにくい。

◎事例1 ニーズと支援策

母の心配事 …食事、入浴、着替え、洗濯、掃除等
栄養と清潔の保持

物忘れの進行…認知症の疑い、閉じ込めり

支援策 …近隣の声掛け、包括支援センターの訪問、相談、
医療受診、介護サービス（訪問介護、デイサービス）

長男の心配事…母同様の日常の衣、食

人間関係の挫折、引きこもり…精神疾患の疑い

支援策 …母の支援者としての相談、生活の困りごとの相談、
受診、障害サービス、就労相談

支援機関

民生委員、地域包括支援センター、医療機関、介護支援事業所、
介護サービス事業所、相談支援事業所、介護福祉課、障害福祉
課、社会福祉課、ハローワーク

◎事例1 連携図

母：75歳

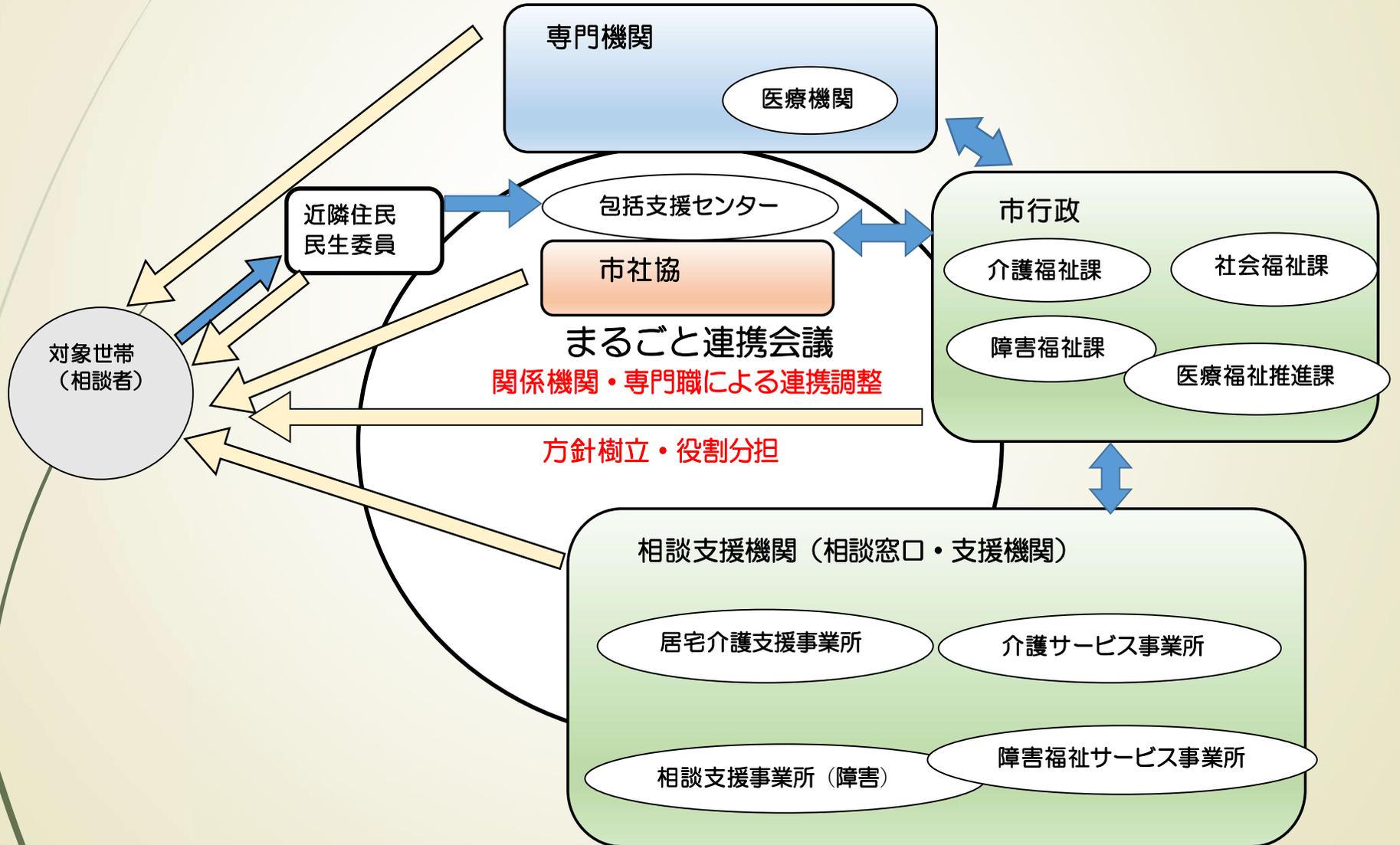
父：5年前に死亡

長男：43歳 引きこもり

長女：40歳 結婚し市外転出

住居：1戸建て住宅

相談支援連携



◎事例2

母：23歳 父：24歳 とともに知的障害のある夫婦で障害年金の収入がある。結婚を機に父のアパートでの住まいとなった。長女1歳8か月。

●課題

- ・第1発信者…近隣 第1受信者…市行政（子育て支援課）

「赤ちゃんの泣き声と女性の叫び声がある」・・・気づき

- ・通告受理後、要保護児童対策地域協議会の対象ケースとして登録し
当該世帯の情報収集、方針協議の後、支援を開始する。

相談支援事業所…当初は祖父母の支援があったが、最近は援助も途切れがちである。父はA型事業所で働く。母の親は市内に住む。父の親は県外で遠方に住む。

健康推進課 …長女1歳8か月 健診では言語に遅れがある。

出産後は、保健師やサービス事業所の見守り等支援で何とか子育てもできていたが、父が非協力的で母の家事・子育ての負担感が高まり最近はや育児放棄ぎみになっている。

◎事例2 ニーズと支援策

- 子どもの安全**…食事、入浴、着替え等 栄養と清潔の保持
- 支援策** …障害サービス、保健師訪問、保育所・発達支援センター
- 母の心配事** …育児、家事がしんどい、父に協力してほしい
- 支援策** …母の相談、障害サービス、母の親への協力依頼
- 父の心配事** …仕事が大変、家事はできない、金銭管理も苦手
- 支援策** …父の相談、障害サービス

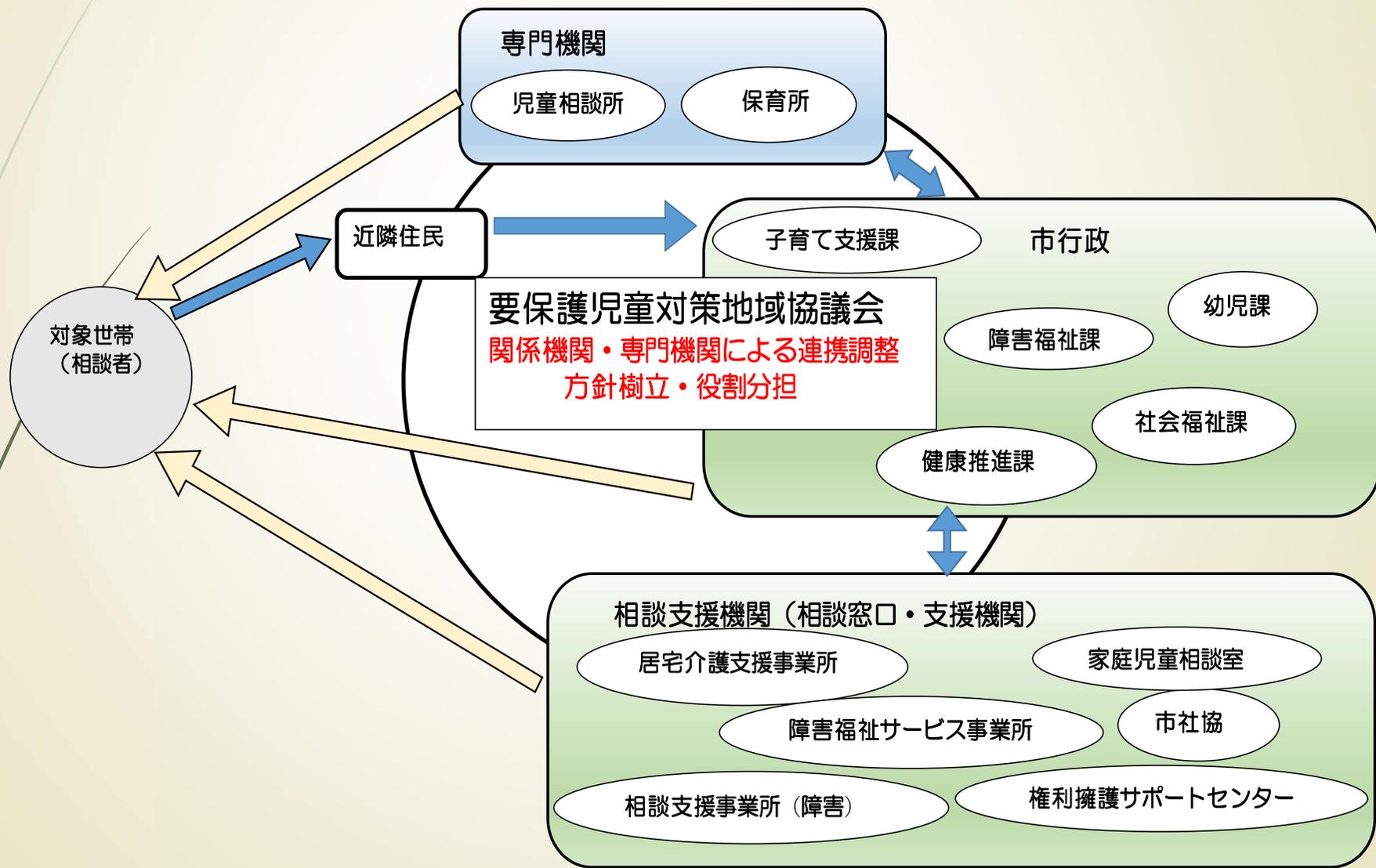
支援機関

子育て支援課、家庭児童相談室、相談支援事業所、障害福祉課、社会福祉課、障害福祉サービス事業所、健康推進課、保育所、幼児課、市社会福祉協議会、権利擁護サポートセンター

◎事例2 連携図

母：23歳 父：24歳 とともに知的障害のある夫婦で障害年金の収入がある。
結婚を機に父のアパートでの住まいとなった。長女1歳8か月。

相談支援連携



◎事例3

男性：30歳 精神障害手帳あり アパート1人住まい

●課題

第1発信者…住民 第1受信者…警察

第2受信者…福祉事務所（社会福祉課）

- ・公園での喧嘩がきっかけで孤立・困窮が発見された。
警察を通じての聴き取りで、
大学卒業後就職するも、職場の人間関係がうまくいかず、
トラブルを繰り返し、精神科クリニックに通院治療していたが、休職後離職した。以後1年間無職のままである。
両親は健在だが遠方で疎遠となっている。
という状況が把握できた。

◎事例3 ニーズと支援策

男性の困り事…食べるものがない、家賃も滞納、仕事がない、
受診していない、人と話すのが怖い

支援策 …生活保護申請、治療、借金・家計の整理、
障害福祉サービス、就労支援、障害年金の検討

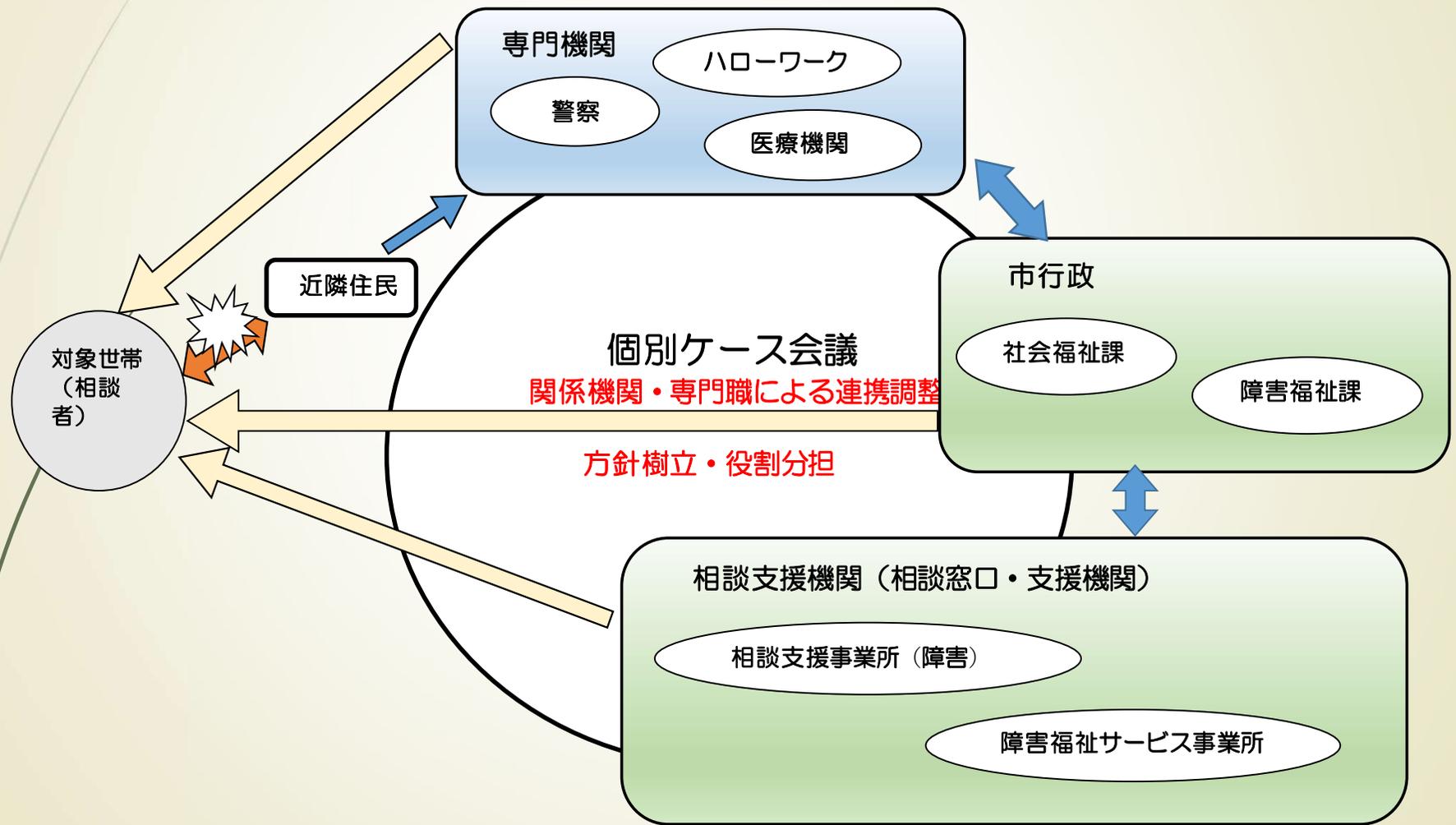
支援機関

社会福祉課、障害福祉課、相談支援事業所、民生委員、
障害福祉サービス事業所、ハローワーク、医療機関

◎事例3 連携図

男性：30歳 精神障害手帳あり アパート1人住まい

相談支援連携



5 まとめ

- 事例は創作（フィクション）です。
- ケースに出会ったら、目の前に表出されている状況の背景にあるさまざまな要因を想像してみることが大切です。
- 疑いや調査、詮索ではなく、援助の視点からニーズを見つけてください。この見立てが極めて重要です。（アセスメント）
- 支援の関係者がそれぞれの視点から、出来る援助を出し合い、目標設定し、分担して計画的に実践します。（プランニング、実践）
- 定期的に評価し、うまくいかななくても、誰かのせいにせず、チームワークを良くし、目標からぶれずに粘り強く継続することで、対象者が自ら変わろうとする力を持ってくれば、それがスタートになります。